



## 海外展 「日本の考古 - 曙光の時代」

本展示会は、文化庁が2004年7月24日から2005年1月31日まで、ドイツ連邦共和国ライス・エンゲルホルン博物館 マンハイム市 及びマルチン・グロピウス・パウ展示館(ベルリン市)において、我が国の後期旧石器時代から奈良時代にわたる代表的な考古資料を展示し、考古学研究の現況を紹介しようとするものです。

この企画に対して、奈良文化財研究所は文化庁に全面的に協力し、2003年度から各時代にわたる出品リストの作成、図録用の写真撮影や本文執筆などにあたり、2004年5月には出品の借用・集荷にも携わりました。この間、文化庁やドイツの日本における責任者であるシュタインハウス氏との協議は幾度となくありました。

展示会への出品は、旧石器・縄文時代が19件(うち重要文化財10件)、弥生時代が40件(うち国宝2件)、古墳時代が22件(うち重要文化財13件)、飛鳥・奈良時代が27件(うち国宝3件、重要文化財4件)です。1件(1遺跡)で出品1点の場合も稀にありますが、1件で出品100点近くの場合もあり、出品総点数は約1500点と相当の数量になります。

飛鳥・奈良時代の出品は、その多くが奈良文化財

研究所の発掘したものです。展示は、飛鳥から大都市・平城京が形成されるまでの歴史を、復原図や建物模型で示すことから始めています。この時代に、碁盤目状の大都市が極東の列島にあったことに、ヨーロッパの人々はきっと驚くでしょう。天皇の内裏正殿模型、長屋王邸や東院庭園の模型も古代日本の理解に役立つはずですが、当時の政治・経済の成熟度は、「文書行政」「貨幣経済」「時を支配」という欄を設けて解説しています。木簡・漆紙文書、筆・墨・硯、無文銀銭・富本銭・和同開珎などを展示して、法律に基づいた文書による行政がおこなわれていたことや貨幣が用いられていたこと、そして飛鳥・水落遺跡の水時計模型の写真パネルなどで、役人が時刻に従って精勤していたことを示しています。信仰については、山田寺・興福寺等から出土した磚仏・鎮壇具、絵馬・土馬・人形・斎串・人面土器などの祭祀遺物を展示・解説しています。7世紀のハイテク工場であった飛鳥池遺跡については、ドイツ側の強い要望もあり、ガラス・鑄造・鍛冶・富本銭・漆等の生産に関わる代表的諸遺物を出品し、工房復原図も添えて成果を示しています。最後には、キトラ古墳など飛鳥・奈良時代の死後の世界にも触れています。

ドイツへの搬送は6月末。航路の安全と展示会の成功を祈っています。(協力調整官 毛利光俊彦)



平城宮内裏正殿模型(1/10)



長屋王邸模型(1/100)

## ✿ 発掘調査の概要

### 藤原宮朝堂院東第三堂（飛鳥藤原第 132 次）

1月からの5ヶ月間に及んだ調査がようやく終了しました。3月20日の現地説明会では、藤原宮朝堂院の東第三堂は桁行15間（約62m）梁行4間（約12m）であったと報告しました。すぐ北にある東第二堂の場合、桁行は15間と同じですが、梁行は5間（約15m）あり、東第三堂より一回り大きくなっています。これまで藤原宮の朝堂は、日本古文化研究所の想定や平城宮の状況などから、第二堂と第三堂は同一規模の建物であるといわれてきましたが、そうではないことが判明したのです。東第一堂（第107次）東第二堂（第120次、125次）東第三堂（第132次）と順番に発掘してきた結果、それぞれ構造や規模に違いがあることが明らかになってきました。東第一堂・東第二堂は、国政を審議する大臣や大納言・中納言・参議の着座する場であり、第三堂以下と格差をつけたと理解することができます。

ところが、調査も終盤に入ってから、意外なことがわかりました。東側に柱筋がもう一列分存在することが判明し、当初の造営計画では、東第三堂は梁行5間であった可能性が高まったのです。最終段階の東第三堂が梁行4間であったことはほぼ動きませんので、5間の建物が完成する前に計画変更がなされたか、建て替えがあったかのいずれかでしょう。調査班は前者であるとみていますが、今後の朝堂院地区の発掘調査によって検証していく必要があります。

この5間目となる柱筋は、断割調査をきっかけに発見することができたものです。少し場所がずれていたら、5間目となる柱筋の存在に気がつかなかったかもしれません。発掘調査の怖さを改めて思い知らされました。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 市 大樹）



手前が5間目となる柱筋（北東から）

### キトラ古墳の調査（飛鳥藤原第 130 次）

壁画の保存・修復と調査を目的とした仮設保護覆屋のなかで、2004年1月末から残余の墓道部の調査が始まりました。3月末までに墓道床面でコロのレール痕跡（道板痕跡）4条と穴2個を検出し、墓道奥で石室の前面部を露呈させました。石室は閉塞石（南壁）の西側が盗掘時に破壊されていて、人一人がようやく入れる盗掘孔があいていました。

そこからみた石室内の壁画は、息を飲むほどのものでした。躍動する四神、居並ぶ十二支像、天空の星々。それらは練達の画家ならではの筆づかいを今に伝え、飛鳥時代最高の芸術の一つとって過言ではありません。

がしかし、壁面の漆喰は大きく剥がれ落ち、残された絵も風化と破壊の危機に直面しています。今後、石室内に流れ込んだ土を除去し、副葬品などを確認したのち、壁画の保存と修復が本格化します。

なすべきことは山積みです。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 花谷 浩）



キトラ古墳墓道と石室



キトラ古墳壁画の十二支寅像（赤外線写真）



### 平城宮東区朝集殿院の調査（平城第 370 次）

平城宮の中核部は、大きく2つの区画に分かれています。このうち平城宮の中央部、第一次大極殿や朱雀門などが位置するのが「中央区」で、内裏や第二次大極殿などが位置しているのが「東区」です。今回調査をおこなっている「朝集殿院」は東区の南方に位置しており、元日朝賀などの儀式の際に貴族らが集合し、儀式が始まるまで待機する場所だったと考えられています。

これまで朝集殿院でおこなわれた調査は、主に朝集殿院の範囲や区画施設の構造を明らかにするためにおこなわれてきましたが、朝集殿院の中央の広場部分の状況は不明のままです。そこで、今回新たに調査区を設け、調査を平成16年4月1日より開始し、現在も継続中です。

調査の結果、南門から北へ続く道路の側溝を検出することができました。側溝の位置関係から推定される道路幅は約24mで、朝集殿院南門から朝堂院南門へと南北に続いていることが明らかとなりました。そしてこの南北道路の側溝の内側に、東側では8基、西側で9基の柱穴列が南北に並んでいる状況を確認しました。このような柱穴は朝集殿院南門や朝堂院南門、そして朝集殿院南方の壬生門付近でも確認されています。これらの柱穴列の性格についてですが、平安時代にまとめられた『延喜式』などの記載によると、元日朝賀や外国の使者を迎える儀式の際に、朝堂院から朱雀門に至るまでの各所に旗を立てる規定があります。おそらく、これと同様のことが平城宮でもおこなわれていたと推定できるのではないのでしょうか。

今回の調査ではもう1カ所、朝集殿院のやや東よりに調査区を設定しました。この調査区は、朝集殿院の主要な建物である朝集殿のうち、東朝集殿



朝集殿院中央部の調査区（北東から）

と一部重複するかたちで設定されています。東朝集殿は唐招提寺の講堂として移築されたとの記録があり、1968年この東朝集殿の遺構を確認するために発掘調査がおこなわれました（第48次調査）。その調査の結果、著しく削平を受けた基壇跡や朝集殿院の東面築地が確認されました。

その後、平城宮各所の発掘調査が進展するにつれ、東区朝堂院では奈良時代前半に掘立柱建物が建てられ、奈良時代後半に基壇をともなう礎石建建物を改築されることが明らかになりました。また、朝集殿院の区画も掘立柱塀から築地塀へと変遷することもわかってきました。このような成果を受け、今回の調査では東朝集殿を再調査し、その変遷過程を明らかにすることが主要な目的でした。

そこで調査区の各所で基壇の下層がどのような状況になっているかを調査したのですが、単独で存在する柱穴を1基確認したのみで、掘立柱建物のようなまとまった遺構を確認することができませんでした。しかも、できるだけ基壇を壊さない方針で調査を進めていたため、これ以上の情報を得ることも難しい状況です。とはいえ今回の調査の結果、①下層に建物は存在しない、②基壇上層の礎石建建物より規模が小さな建物が基壇の中に隠れている、③下層建物が基壇の東寄りに位置している、という3つの可能性を指摘することができました。このことによって、今後の朝集殿の調査において、1つの指針を示すことができたといえます。なお、6月5日には現地説明会を開催し、好天にも恵まれ、600人以上の参加がありました。

（平城宮跡発掘調査部 林 正憲）



東朝集殿の発掘作業風景（北東から）



写真1：<sup>さしげに</sup>纏銭〔原寸〕

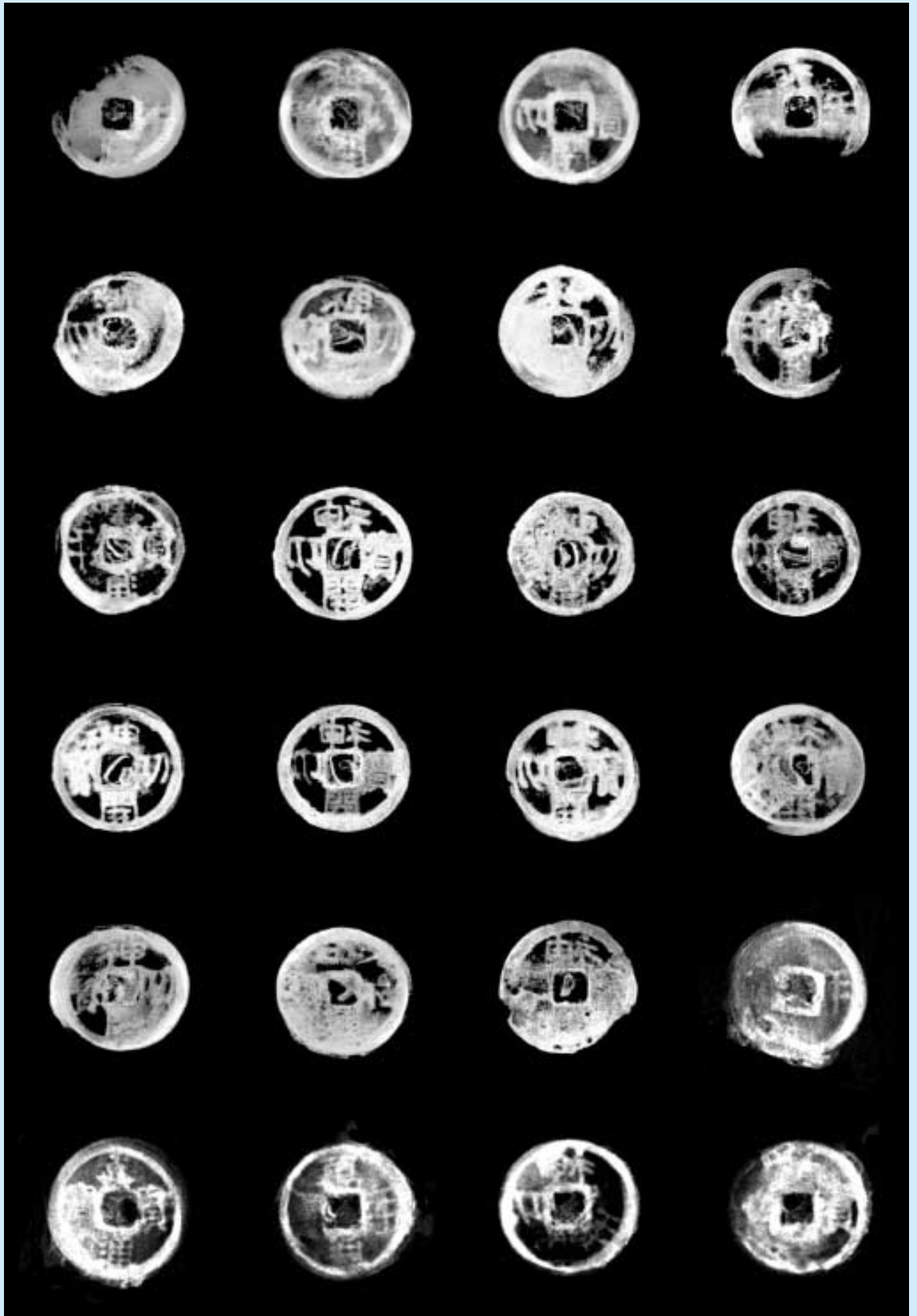
### 文化財用X線CTによる銭貨の調査

写真1に示した<sup>さしげに</sup>纏銭は、京都府長岡京市の長岡京跡(右京四条三坊十町)から出土したものです。纏銭とは孔の開いた銭貨を纏(さし)に通された状態のことを示す名称です。

纏銭の銭貨の種類は、通常、固着した銭貨を切り離して調査をおこないません。しかし出土時の纏銭の形状を保持した状態での保存を図るために、非破壊で調査できるX線CT法により断層写真撮影をおこない、銭種を明らかにすることにしました。得られた断層画像のうち、銭種の判明したものの一部を写真2に示しました。X線CT撮影に際し、銭貨に鑄された文字をできる限り判読するため、数回纏銭の向きを変えて撮影しています(写真スケールは任意、銭の直径は2.4cm前後)。

総数は72枚と判明し、そのうち58枚の銭種を明らかにすることができました。判明した銭種は、和同開珎(708年初鑄)、万年通宝(760年初鑄)、神功開宝(765年初鑄)の3種類のみであり、神功開宝36枚、万年通宝16枚、和同開珎6枚を確認することができました。

(埋蔵文化財センター 降幡順子)



さしげに  
写真 2 : 緡銭の X 線 CT 画像



## 研究室紹介

### 飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室

本調査室では、飛鳥・藤原地域の発掘調査で出土した木簡の整理・解読や、遺跡・遺物の文献による検討を主に担当しています。

ここ数年、飛鳥藤原宮跡発掘調査部の手がけた発掘調査では、たくさん木簡が出土しています。飛鳥池遺跡約8000点、藤原京左京七条一坊約13000点、石神遺跡1000点以上、藤原宮朝堂院5000点以上……。

木簡が出土する現場では、木簡の取りこぼしがないうように、土をコンテナにつめて持ち帰ります。その洗浄から私たちの仕事は始まり、木簡の整理・釈読・公表・保管という流れをたどっていきます。(奈文研ニュースNo.11の研究室紹介をご覧ください。)その具体的な仕事内容は、たいへん根気のいる仕事です。

飛鳥・藤原に都がおかれた7世紀は、律令国家が建設されてくる重要な時期にあたります。そのため、同時代史料である木簡には大きな期待がかかっています。古い時期の木簡であることから、しばしば「日本最古の」に関する史料となり、注目を集めたりもします。石神遺跡で出土した「日本最古の暦」の木簡は、記憶に新しいでしょう。

また、一見地味な木簡から、意外な事実が知られることがあります。写真の木簡は「(表)多土評難田(裏)海部刀良佐匹部足奈」と書かれており、7世紀段階に、後の讃岐国多度郡に「難田」(カタ



(表) (裏)

石神遺跡木簡

ダ)というサトがあったことがわかります。空海の出身地を記した史料に「方田郷」(カタダノサト)がみえますが、まさに同じ地名でしょう。従来「カタダ」と記された古代史の史料は他に知られていなかったため、空海の出身地は「弘田郷」ではないかといわれてきましたが、再検討の余地がでてきたといえるでしょう。ちなみに、「佐匹」は「佐伯」のことです。空海が佐伯氏出身であったことが想起され、興味は尽きません。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 市 大樹)

### 埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室

当研究室では、遺跡の発掘調査技術の向上や研究の進展、遺跡の保存活用に資する研究の一環として、第一に、官衙遺跡発掘調査法の研究を進めています。この研究では、古代官衙建物などの遺構や遺物の特徴等について分析し、それらの情報を遺跡から発掘し抽出する際の専門的知識や技術・留意点を明らかにすることを目指しています。研究成果の一部は、『古代の官衙遺跡 遺構編』、『古代の官衙遺跡 遺物・遺跡編』として刊行しています。掘立柱建物や礎石建物など官衙遺構の諸属性と特徴、発掘調査の手法、官衙関係遺物の特徴、各種の官衙遺跡ごとの特徴や類型などをまとめたものです。手引き書としても活用され、各地の官衙遺跡発掘調査や出土遺物観察の技術向上に寄与できればと期待しています。

第二には、古代の官衙・寺院・集落・豪族居宅等の遺跡の発掘調査成果から、文献名、建物遺構の諸属性、主要出土遺物の種類などのデータを収集し、データベース化する作業もおこなっています。これまでに遺跡数4,000件余り、文献数約18,000件、建物データ10,000件以上を収集しています。これらの情報を広く共有化するため、数年以内に奈文研ホームページ等で基礎的データが公開できるよう、最新データへの更新、データ追加、データベース構造の改良なども進めています。

第三には、官衙と周辺寺院との関係などを追求するため、ケーススタディとして鳥取県気高町上原遺跡群(因幡国気多郡衙・寺院)の遺構・遺物の整理をおこない、その成果の一部を上原遺跡群発掘調査報告書(気高町2003年刊)としてまとめています。このテーマでは、瓦類などの分析を踏まえながら、郡衙周辺寺院の性格やその役割、郡領域と地方豪族の交通関係などについても研究を継続しています。

第四に、在地における律令国家支配のあり方を学際的に考え、現状での研究成果や問題点を整理し公開普及することを目指して、古代官衙・集落に関する研究集会を毎年一度開いています。2003年度は「駅家と在地社会」をテーマに開催しました。2004年度は「地方官衙と寺院」について討議する予定です。

このほか、地方公共団体からの依頼に応じて、官衙・寺院遺跡等の発掘調査や保存整備活用等について指導助言する職務も重要な位置を占めています。

(遺跡調査技術研究室 山中敏史)

## 奈文研ホームページをリニューアル

奈文研ホームページのリニューアルをおこない2004年5月より所外に公開しています。今回のリニューアルでは、ページ構成をわかりやすく再編成し、見やすく統一されたデザインに一新しました。そして、文化財関係の最新ニュースの配信等を新たに追加し、文化財に関わる各種情報提供について内容の一層の充実を図りました。

トピックスには公開講演会、発掘調査現地説明会等の各種行事の開催情報をいち早く案内するとともに、それらの資料も従来どおり掲載しています。また、木簡データベース等の各種データベースを公開して所外の研究者・考古学・古代史ファンの要望にこたえています。

公開以来、出土品ギャラリーによるバーチャル

展示・平城京クイズを中心に多くのアクセスが認められています。

ホームページのアドレスは、以下のとおりです。  
http://www.nabunken.jp



### 図書資料室の利用について

図書資料室には、遺跡の発掘調査、歴史的建造物の全国の報告書等を中心に約28万冊の図書を所蔵しています。

一般の方も、図書資料室の利用が可能です。

#### 利用時間

月曜日～金曜日：午前9時～午後4時30分  
(ただし、休日、年末年始を除く。)

#### 利用手続

図書資料室のカウンターで利用手続きがあります。  
できるだけ事前に書名等をご連絡願います。

#### 閲覧

係員が、利用希望の図書を書庫からお出しします。  
貸出は、おこなっておりません。

#### 複写

著作権法を遵守してください。(有料)  
郵送等は、おこなっておりません。

#### お問合せ先

文化財情報課 図書・情報係  
電話 0742-30-6754  
FAX 0742-30-6750  
E-mail library@nabunken.go.jp  
http://www.nabunken.jp/shisetsu/nbk01.html

### 刊行物の販売(価格は税込みとなっております。)

刊行物名	価格	飛鳥資料館	平城宮跡資料館
奈良文化財研究所紀要2003	1,500		
奈良文化財研究所紀要2002	1,500		
奈良文化財研究所紀要2001	2,000		
遺跡を探る	1,000		
飛鳥のイメージ	900		
あすか以前	1,200		
A0の記憶	1,000		
キトラ古墳壁画	300		
飛鳥-こころとかたち	1,000		
平城宮跡資料館図録	1,000		
万葉の衣食住	1,000		
あすかの石造物	1,500		
古年輪	1,000		
斉明紀	1,000		
飛鳥の湯屋	1,000		

### グッズの販売(価格は税込みとなっております。)

刊行物名	価格	平城宮跡資料館
箱入りメモ(大極殿)	340	
箱入りメモ(四神)	340	
クリアファイル(隼人の楯)	200	
クリアファイル(鬼瓦)	200	
クリアファイル(装束)	200	
クリアファイル(朱雀門)	200	
一筆せん(四神)	200	
一筆せん(建造物)	200	
ボールペン(ブルー)	120	
ボールペン(グレー)	120	

#### お問合せ先

平城宮跡資料館では、インターネットによる販売はおこなっておりません。刊行物等をご購入の場合は、宅配または郵送でお求めできますので、下記へ連絡願います。

http://www.nabunken.jp/publication/pub\_sell.html

飛鳥資料館 TEL 0744-54-3561(代)  
平城宮跡資料館 TEL 0742-30-6756

## 飛鳥資料館のみどころ (5)

### - 特設コーナー「キトラ古墳壁画」の新設 -

この度、飛鳥資料館では、キトラ古墳の最新の調査成果を紹介するコーナーを、地階特別展示室の隣に新設いたしました。

今年に入り、キトラ古墳の調査が進むにつれて、壁画の詳細が明らかになってきました。と同時に、その成果の公開も望まれるようになってきました。

当資料館では、文化庁の協力を得て、新聞紙上などに提供された情報をいち早く皆様にご覧いただけるように、今回の展示を企画いたしました。

現在は、先に新聞紙上を賑わせた、十二支の寅

像や青龍の赤外線デジタル写真を中心に、その関連資料として、中国・唐代の俑（土製人形）や朝鮮半島の統一新羅の蠟石十二支像などの写真パネルを展示しています。その他、以前、当資料館で公開した朱雀や白虎、天文図なども同時に展示していますので、キトラ古墳壁画全般における最新の写真を見ることができます。

また、今後、発表された新しい情報を適宜、展示替えをおこないながら、提供していきたいと思っておりますので、今回は特に期間を設けずに、当面の間、公開していきたいと思っております。

新聞やテレビのニュースなどでしかご覧いただけなかった、キトラ古墳壁画の世界を堪能してみたいはいかがでしょうか。

皆様のご来館を心よりお待ちしております。

(飛鳥資料館 西山和宏)



## 記 録

### 埋蔵文化財センター研修

報告書作成課程専門研修	
平成16年1月14日～1月23日	29名
城郭遺跡調査課程専門研修	
平成16年1月28日～2月4日	33名
自然科学的年代決定法課程特別研修	
平成16年2月17日～2月20日	11名
陶磁器調査課程特別研修	
平成16年2月24日～2月27日	40名
動物考古学課程特別研修	
平成16年3月2日～3月5日	11名
写真基礎課程専門研修	
平成16年5月11日～5月21日	14名
保存科学課程専門研修	
平成16年5月27日～6月9日	12名

### 現地説明会

飛鳥藤原第132次（藤原宮朝堂院東第三堂）発掘調査	
平成16年3月20日（土）午後1時30分～	
平城第370次（平城宮東区朝集殿院）発掘調査	
平成16年6月5日（土）午後1時30分～	

講演会：NPO平城宮跡サポートネットワーク主催  
奈良文化財研究所後援

平成16年5月17日（月）午後3時～

田中 琢 元奈良国立文化財研究所長  
「発掘調査と平城宮跡」

### 公開講演会

平成16年5月29日（土）午後1時30分～  
町田 章 所長

「考古学よもやま話 - 日本における土着文化  
と外来文化 - 」

島田敏男 平城宮跡発掘調査部遺構調査室長  
「平城宮の瓦屋根」

吉川 聡 文化遺産研究部研究員  
「北浦定政と平城京研究」

### 最近の本一所員の編著から一

井上和人著『古代都城制条里制の実証的研究』  
学生社

山崎信二著『古代瓦と横穴式石室の研究』  
同成社

小野健吉著『岩波日本庭園辞典』 岩波書店

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp>

Eメール [jimu@nabunken.go.jp](mailto:jimu@nabunken.go.jp)

発行年月 2004年6月